

堀合先生に学ぶ(1)

立川多恵子

はじめに

堀合文字先生はお茶の水女子大附属幼稚園の教諭として、昭和の変化の多い時代を子どもと共に生き抜かれた

人である。退官後は十文字学園の理事長の懇請を受けて、十文字幼稚園の主事に就任し、子どもたちとの新しい生活を始めた。

堀合先生は倉橋惣三の教え子である。倉橋惣三は大正の初めお茶の水女子大の前身である東京女子高等師範学校で教鞭を執りながら、同校保育実習科では保母養成に

関与していた。堀合先生は昭和十四年三月保育実習科を卒業すると同時に附属幼稚園の教諭になり、四十四年の長きにわたって師の教えを實踐に生かすべく努力した保育者でもある。

十文字幼稚園の主事に就任しても、今なおクラスを担当し、子どもとの生活に全力投球している先生の姿に限りない保育への情熱を感じる。昨年からは十文字短大幼児教育科の若きスタッフ上垣内伸子さんと一緒に、先生のクラスに入らせていただき先生の保育を学ばせて貰っている。

入園当初の保育

堀合先生の担任するすみれ組（三歳児）に入るのは今回で二回目である。一回目は入学式から数えて四日目であったが、子どもたちが思いのほか落ち着いているのに驚いた。私はこのまま落ち着いてしまおうのだろうかと思議に思った。ところが今回は登園時から先生が一人ひとりを靴箱まで出迎え、上靴を履かせたり、帽子を取って掛けて上げたり、鞆も取って上げたりしても、子どもの中には保育室に入るのを拒んで廊下に大の字になって暴れる子、大泣きして先生に抱かれ保育室に入る子さまざまである。緊張がほぐれて、子どもが少しずつ自己主張し始めた結果かもしれない。

降園後、私は先生に「一週間ぶりで、すみれ組に入れていただいたのですが、『いよいよ豆がはじけ出したな』と思いました」と話した。

たしかに先週訪ねた時はすみれ組十七人の子どもたちが先生の掌に入ってしまったように見えて「さすがベテラン」と感心ながらも、これでいいのだろうか考えてし



▲ 保育中の堀合先生

まったが、今回は子どもがいろいろなハプニングを起こすので、さすがの先生も子どもの世話をするため各所を飛び回っていた。

入園当初は慣れないので、身を固くしていた子どもも、次第に自分を出し始めてきたのか、先生のようなベテランでも子どもの行動の予測がつかなくて、忙しく飛び回ることになったのだろう。もっともこうした混乱期には先生が手を掛けることも多く、信頼関係が育つ機会でもある。この時期に子どものやることを傍観しているような保育者だったら、子どもとの関係は深まらない。先生が飛び回りながら子どもとのつながりを持つことによって、やがて新たな落ち着きが実現する。

そこで今回は入園期、子どもとの関係を深めようと努力する先生の保育を実践に即して考えてみようと思う。

子どもの不安を受け止める

その日は「ここが痛い、あそこが痛い」と訴えてくる子どもが多く、先生は救急箱を片手に薬をつけるのに忙

しかった。たまたま一人の女の子が膝がしらを抱えて先生のところへ「痛い」と訴えに来た時、私はどんな怪我かと心配して覗いて見て驚いた。

子どもの差し示す傷はどう見ても、一週間位前に出来たような古傷であり、既にかさ蓋になっていて、殆ど治っている状態だった。しかし先生はそのかさ蓋に丁寧に薬をつけながら「幼稚園のお薬はともよく効くからすぐよくなるわよ」と言った。そして上から丁寧にカッパンを貼ってやった。その時の先生の表情や態度には子どもに対するいとおしさが滲み出ていた。

子どもとのスキンシップを通してルールを伝える

入園当初の子どもは上靴を履いたまま庭に出る子どもが多いが、そうした子どもに対して先生は決して叱らない。そして「よっちゃんのお靴どれかしら」と言っただけを探す。すると一人の男の子が飛んで来て「ぼくのはマングアついているんだ」と言っただけで指差す。先生は目を細めながら「いい靴ね、だれに買ってもらったの、ちょっと

履いてみてくださる」と言って、その子を膝にのせて靴を履き替えてやる。「ちょっと立って見て」の先生の言葉に子どもは得意そうに両足を合わせぴんと立つ。先生が「あ！ やっぱりすてきね」と言うと、よし夫は嬉しそうに跳ね回る。

傍で先生とよし夫のやりとりを見ていた他の子が「ぼくのはこれ」と言って靴を持ってくる。見るとその子の足も上靴のままである。先生は「あら！ やっちゃんのもかわいいお靴ね」と言いながら、その子を抱いて靴を履かせてやる。そして「今度お庭に出る時はこの靴履きましようね」と言う。やす雄には「今度お庭に出る時は……」ということばが理解できると考えたのだろう。子どもによって先生の対応の仕方は少しずつ違っている。

入園当初の三歳児には上靴（白い靴）は室内で履いて、下靴は園庭で履くといった園生活のルールは理解しにくい。先生はこうしたルールを伝えるのもスキンシップを通して行う。習慣が確立する頃にはスキンシップが功を奏して先生とのつながりも確かになるに違いない。

子どもは先生に抱かれて靴を履かせて貰った楽しさと一緒に、園庭に出て行く時下靴に履き替えるルールが分かる。

こんなこともあった。砂場で子どもと遊んでいた時、先生が急に立ち上がり、園庭を走って行かれた。私は何ごとが起こったのかと先生の走って行く先を見ていたが、テラスで他の保育者に足を洗って貰った子どもをかえるようにしてタオルで濡れた足を拭き始めた。

先生は子どもの足を拭いてやる機会をとでも大切にしている。絶対のスキンシップのチャンスと考えている。子どもとの信頼関係が育つまでは、どんなに子どもの世話が大変でも、他の人に手伝って貰わないことにしているようだ。

一人ひとりの子どものペースを大切にする

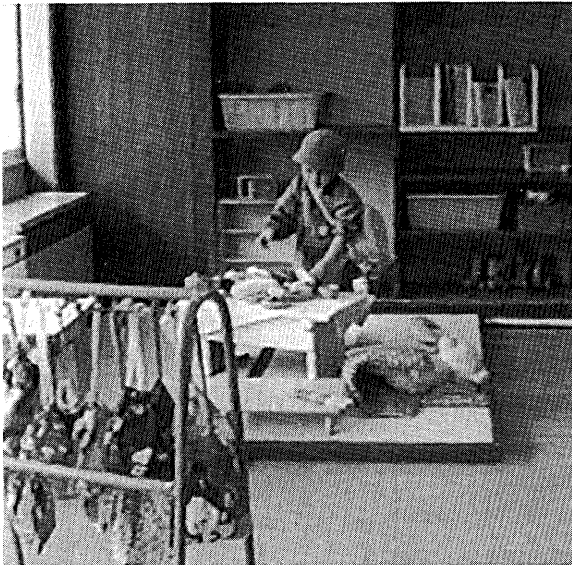
降園時間になってからしようじがままごとを始めた。先生は他の子の降園の仕度を手伝いながら、彼の遊んでいるのを見ていたが何も言わなかった。しようじはテー



ブルの上に一つ一つきれいに器を並べると、ダイニング
 キッチンの引き出しの整理を始めた。フォークはフォ
 ークでまとめ、スプーンはスプーンでまとめて一本一本き

れいに並べる。他の子が降園の用意をして椅子に座った
 ところで、先生はしょうじの肩にかばんを掛けてやっ
 た。しょうじはかばんを肩に掛けたままテーブルの上

◀ しょうじのままごと



並んだ器で食べたり、飲んだりしていたが、突然うなずくように首を振って降園の列に加わった。私は、しょうじが自分なりに「つもり」を達成して、降園の列に加わったのだと思い、降園時から始まった遊びではあったが、彼なりの充実感を得たに違いないと考えた。

先生は「しょうちゃんは最近、朝のうちはどうも調子が出ないのでしょ」と話していた。そういえば、降園時になつて遊び出したしょうじは今朝も靴箱のところまでお迎えに出た先生の手を振り払って帰ろうとしたので、先生が保育室まで抱いて連れて来たが大あはれして、しばらく床の上に大の字になっていたことを思い出した。

先生の話によると、しょうじには今年卒園した兄があり、幼稚園にも何人か顔見知りの子がいて、先日もその子たちに砂をかけられ、大泣きしてから登園を渋るようになったと言うことだった。子どもにもその子なりの事情があり、園生活のリズムにのれるまでは充分時間をかけて待つてやるのが大切であり、それが結局子どもとの関係を大切にすることになる。

むすび

堀合先生は一人ひとりの子どもとのつながりを大切にしている。したがって入園当初の先生の保育はそこに重点が置かれていると言っている。

前述した幾つかの事例は先生が子どもとの関係を具体的にどのようにして育てているか、保育を見て私なりに捉えたものである。

その中には先生が意図的に生み出した子どもとの関わりもあるが、意図しないで生まれた関わりもある。いづれにしても、師から学んだことを基にして、更に長年の保育実践から自ら学んで得た保育観から生み出されたものである。保育は子どもを育てると同時に保育者自身を育てると言われるが、堀合先生はこの言葉を文字通り実現させた保育者の一人と言えよう。

(十文字学園女子短期大学)